

家庭での食事場面における親子会話の脱文脈度の観点からの分析

田中 弥生 (国立国語研究所 研究系) *

江口 典子 (国立国語研究所 研究系)

小磯 花絵 (国立国語研究所 研究系)

Analysis of Parent-Child Conversation During a Meal Situation at Home from the Perspective of Decontextualization.

Yayoi TANAKA (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

Noriko EGUCHI (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

Hanae KOISO (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

要旨

本研究は、修辞機能分析の分類法による日常会話分析の一環として、家庭での親子の談話について修辞機能を確認し、脱文脈度の観点から検討するものである。本研究では、「修辞機能」を「話し手書き手が発信する際に、言及する対象である事態や事物や人物等を捉え表現する様態を分類し概念化したもの」と定義し、脱文脈度は「発話がコミュニケーションの場「いま・ここ・わたし」にどの程度依存しているか」の程度を表す概念とする。本発表では、現在構築中の『子ども版日本語日常会話コーパス』の内部公開データから、家庭での食事場面の親子の談話を対象に、食事についての話題と食事以外の話題での修辞機能の出現、および、食事以外の話題内容の特徴と脱文脈度の関連を確認した。また、子どもの年齢と脱文脈度の関連が確認された。

1. はじめに

本研究は、脱文脈度の観点からのコミュニケーション分析の一貫である。子供の言語コミュニケーションに関して、語彙の理解や、発話構造、語用論的知識の発達など、さまざまな観点から研究が行われている。また、児童の発達や教室談話に関して、「脱文脈化」は議論されている(岩田ほか 1995, 橋本 2009)。教育心理学の分野では、「脱文脈化」を「思い出に相当するエピソード記憶 (episodic memory) を、知識に相当する意味記憶 (semantic memory) に転換する過程」(漁田・漁田 1999:205)としている。また、話し言葉と書き言葉を対比させ、成長とともに論じられることも多い。岩田ほか (1995) は、話し言葉は「相手の表情や身振り、発話のイントネーション、発話文脈といった手がかりに依存しながら日常のなかで自然と学ばれていく」のに対して、読み書き言葉は「対面的な文脈に依存することなく、言語の純粋に形式的な側面のみによっている」ため、「脱文脈的」であるとしている。

* yayoi@ninja.ac.jp

この脱文脈化の程度を可視化できる手法が、「修辞機能分析」の分類法である。本発表では、「修辞機能分析」の分類法によって、家庭での食事場面での会話の脱文脈化の様相を可視化し、親子間のコミュニケーションにおける特徴を脱文脈度の観点から検討する。

本研究において修辞機能とは、「話し手書き手が発信する際に、言及する対象である事態や事物、人物等を捉え表現する様態を分類し概念化したもの」と定義する。また、脱文脈度は「発話がコミュニケーションの場「いま・ここ・わたし」にどの程度依存しているか」の程度を表す概念とする。

修辞機能分析の分類法は、修辞ユニット分析(佐野 2010, 佐野・小磯 2011)を元に、日本語文法の枠組みで修正を加えたものである。テキストの分析単位(概ね、日本語文法の節に相当)ごとに、述部の時制と、主語・主題の話者からの距離の分類から修辞機能が特定され、あわせて脱文脈化指数が特定される。これによって、一般的な内容か個人的な内容か、発話の時空に依存しない内容か依存する内容か、抽象的なことか具体的なことか、などを示すことができる。例えば、子供はまず目の前の「いま・ここ・わたし」に近いことについて話せるようになり、成長とともに過去や、明日のこと、その場にはいないおばあちゃんのことなど、時空を離れた発話ができるようになる。「それ、ちょうだい」と同じ時空にいる親に言うのは文脈化しており、「はやぶさは北海道新幹線だよ」と話すのは同じ時空にいらなくても伝えられるため脱文脈度が高い。

これまで、児童作文、家族の談話、職場の談話、高齢者グループの談話など(田中ほか 2021, 佐尾ほか 2023, 田中・小磯 2019, 田中 2017, 田中ほか 2022, 2023)の分析から、目的や話題内容、状況によって、用いられる修辞機能が異なり、脱文脈度は推移することなどが明らかになっている。田中・小磯(2019)では、修辞機能と脱文脈度の観点からの幼児の談話分析のケーススタディとして、家庭での食事場面における幼児と両親との会話の分析を行っている。その結果、食事場面においては基本的に脱文脈度の低い発話が交わされ、0～4歳の女児の発話の脱文脈度が高くなるのは、両親の発話をきっかけとするものであることが明らかになっている。本発表の目的は、親子の会話における話題内容及び年齢と、脱文脈度の関連を明らかにすることである。現在国立国語研究所にて構築中の『子ども版日本語日常会話コーパス』に収録される予定の、家庭での親子の談話を分析対象とし、言語表現から修辞機能と脱文脈化指数を特定し、話題内容によって、どのように修辞機能が用いられ、脱文脈度が表れているかを検討する。以下、第2節で分析データと分析方法について説明し、第3節で分析結果、第4節で考察を述べ、第5節でまとめと今後の課題について述べる。

2. 分析データと分析方法

2.1 分析データ

本研究の分析対象として、現在国立国語研究所にて構築中の『子ども版日本語日常会話コーパス』(CEJC-Child)プロジェクト内部公開データの、夕食時の親子の会話(Y006 __ 010a 17分24秒、参加者5名)の書き起こしデータを用いる。子供は3人で、年齢は長女11歳、長男7歳3ヶ月、次女2歳3ヶ月である。書き起こしデータの個人名はすべて仮名である。

2.2 分析方法

修辞機能分析は、Rhetorical Unit Analysis(Cloran 1994, 1999) を日本語に適用した修辞ユニット分析(佐野 2010, 佐野・小磯 2011) を元に、日本語文法の枠組みで修正を加えた分類法である。分析手順は、次のとおりである。

1. 分析単位（メッセージ）に分割し、分析対象を特定する。
2. 分析対象のメッセージについて発話機能を分類する。
3. 発話機能が「命題」のメッセージについて、時間要素と空間要素を分類する。
4. 発話機能・時間要素・空間要素の組み合わせから、修辞機能と脱文脈度を特定する。

以下に手順の概要を示す。

2.2.1 分析単位の分割と分析対象の特定

分析単位であるメッセージは概ね節に相当するが、連体修飾節は独立したメッセージとして扱わない。メッセージは「定型句類」（相槌、挨拶、定型句、節の形でないものなど）「主節」（単文、及び主節）「並列」（従属度の低い従属節）「従属」（従属度の高い従属節）「引用」（“と” “思う” などで引用されている部分）に分類する。「主節」「並列」「引用」についてこのあとの分類を行う。

2.2.2 発話機能・時間要素・空間要素

メッセージの種類が「主節」「並列」「引用」に分類されたメッセージについて、発話機能・時間要素・空間要素を分類する。表1に示したように、これらの組み合わせから修辞機能と脱文脈化指数が特定される。【行動】[1] がもっとも文脈に依存した表現で、【一般化】[14] がもっとも脱文脈度の高い表現である⁽¹⁾。

表1 発話機能・時間要素・空間要素からの修辞機能と脱文脈化指数の特定

定義	↑ 高↑空間的距離のレベル↓低						一般化 [14]
状況外	報告 [9]	状況外回想 [10]	予測 [11]		推量 [12]	説明 [13]	
状況内	実況 [2]	状況内回想 [3]	状況内予想 [5]		状況内推測 [6]	観測 [8]	
参加			行動 [1]	計画 [4]		自己記述 [7]	
空間要素	← 低 ← 時間的距離のレベル → 高						
時間要素	現在	過去	未来意志的	未来非意志的	仮定	習慣・恒久	
発話機能	提言		命題				

発話機能は「提言」か「命題」に分類する。「提言」は、品物・行為の交換に関する提供・命令で、基本的には同じ時空に存在する相手に働きかけたり、会話者同士の行為にかかわる発話内容が該当し、【行動】[1] と特定される。例えば、同じ時空にいる相手への「この花見て!」「お醤油を取って」のような行為や物を要求する場合である。「命題」は、情報を交換する陳述・質問で、「私はトマトが大好き」「このトマトは真っ赤だね」「トマトはナス科の植物だ」などが該

⁽¹⁾ 以下、修辞機能を【】で、脱文脈化指数を[]で示す

当する。発話機能が「命題」のメッセージについて、このあと時間要素と空間要素を認定する。

時間要素は、話者のいる時間を基準として、メッセージで表現されている出来事がいつ起こったかを示す要素である。基本的にテンスや時間を表す副詞などによって表現され、「習慣・恒久」⁽²⁾「現在」「過去」「未来意志的」「未来非意志的」「假定」に分類する。

空間要素は、話者のいる場所を基準として、メッセージの中心との空間的距離を示す要素で、主語、主題、述部の主体から判断し、「参加」「状況内」「状況外」「定義」に分類する。

2.2.3 修辞機能と脱文脈化度の特定

表1を参照し、発話機能、時間要素、空間要素の組み合わせから、修辞機能と脱文脈度を特定する。

3. 分析結果

3.1 修辞機能の出現

話者ごとの修辞機能の出現の様子を表2と図1に示す。「定形句類」は、修辞機能ではないが、次女の喃語や不明瞭な発話を定形句類に分類しているため、比較のためにここに示す。ただし、以降の分析には、「定形句類」は含まない。

表2 話者ごとの修辞機能の出現頻度

	定形句類	01 行動	02 実況	03 状況内回想	04 計画	05 状況内予想	06 状況内推測	07 自己記述	08 観測	09 報告	10 状況外回想	11 予測	12 推量	13 説明	14 一般化
父	94	20	97	8	0	3	0	6	15	6	2	3	0	26	1
母	4	4	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
長女	39	4	29	3	0	0	0	8	13	2	0	0	0	11	0
長男	44	1	25	2	0	0	0	5	6	4	1	0	0	23	1
次女	128	10	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

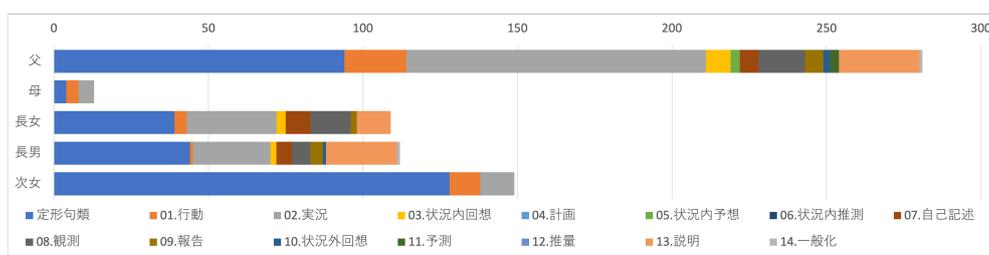


図1 話者ごとの修辞機能の出現割合

表2、図1から、次女の発話は定形句類に分類されるものがほとんどで、分析可能な発話は少なく、また脱文脈度が低いこと、別室にいる母の発話は少なく、脱文脈度が低いこと、父の発話は多く、定形句類と【実況】[02]が多いこと、脱文脈度の高い発話は、父と長女、長男によるものであることなどがわかる。

⁽²⁾ 「習慣・恒久」には、属性、嗜好、評価も含む。

3.2 話題内容による特徴

分析対象の談話は、その話題内容から、大まかに食事に関する発話と食事以外の発話に分けることができる。表3と図2に食事と食事以外の発話における修辞機能の出現頻度と割合を示す。

表3 食事・食事以外の話題の発話における修辞機能の出現頻度

	01 行動	02 実況	03 状況内 回想	04 計画	05 状況内 予想	06 状況内 推測	07 自己 記述	08 観測	09 報告	10 状況外 回想	11 予測	12 推量	13 説明	14 一般化
食事	32	108	4	0	3	0	0	13	0	0	0	0	0	0
食事以外	7	59	9	0	0	0	19	21	12	3	3	0	60	2

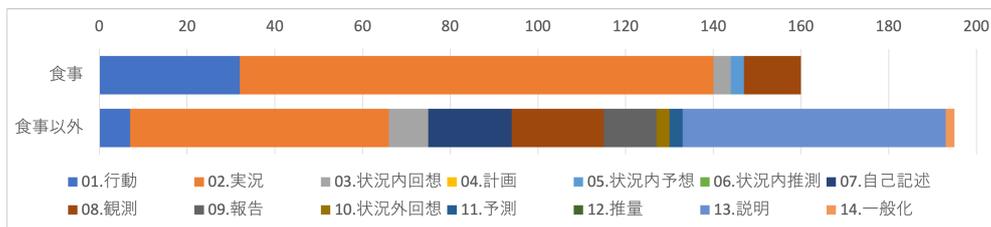


図2 食事・食事以外の話題の発話における修辞機能の出現割合

全体では【実況】[02]が多く、特に食事については脱文脈化指数[08]より低い脱文脈度のみが用いられている。脱文脈化指数[08]以下は、図1に示したように、空間要素が「参加」あるいは「状況内」であるため、食事に関する話題では、その場に関わることのみが話されていることがわかる。

食事以外の話題の発話でも【実況】[02]が多いが、ついで、【報告】[09]【説明】[13]という脱文脈度の高い発話も多い。図1に示したように、【報告】[09]、【説明】[13]は、空間要素が「状況外」で、「いま・ここ・わたし」から離れているものである。

表4と図3に、食事以外の話題の発話の修辞機能の出現頻度と割合を話題別に示した。

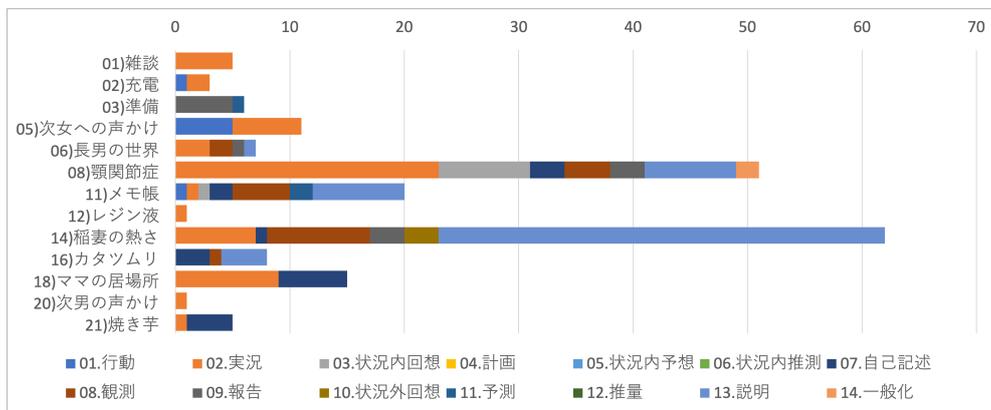


図3 食事以外の話題別の修辞機能の出現割合

食事以外の話題でも脱文脈度の低い発話が多いことから、家庭の食事場面では脱文脈度の低

表 4 食事以外の話題別の修辞機能の出現頻度

	01 行動	02 実況	03 状況内 回想	04 計画	05 状況内 予想	06 状況内 推測	07 自己 記述	08 観測	09 報告	10 状況外 回想	11 予測	12 推量	13 説明	14 一般化
01) 雑談	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
02) 充電	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
03) 準備	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	1	0	0	0
05) 次女への声かけ	5	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
06) 長男の世界	0	3	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	1	0
08) 顎関節症	0	23	8	0	0	0	3	4	3	0	0	0	8	2
11) メモ帳	1	1	1	0	0	0	2	5	0	0	2	0	8	0
12) レジン液	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
14) 稲妻の熱さ	0	7	0	0	0	0	1	9	3	3	0	0	39	0
16) カタツムリ	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0	0	0	4	0
18) ママの居場所	0	9	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0
20) 次男の声かけ	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
21) 焼き芋	0	1	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0

い発話が基本であることがうかがえる。食事以外の話題には、長男が話しかけたが家族の誰も応答せず続かなかった話題なども含まれている。ここでは、まずそれぞれの話題の冒頭の発話を確認し、次に、まとまった発話が見られ、脱文脈度の高い発話を含む「顎関節症」の話題と、「稲妻の熱さ」の話題の2つについて、確認していく。

3.2.1 各話題の冒頭の発話

食事以外の各話題の冒頭の1～2発話を表5に示す。

表 5 食事以外の話題の冒頭の発話と修辞機能・脱文脈化指数

01) 雑談	長女	うっ。	
01) 雑談	次女	ママは？	【実況】 [02]
02) 充電	長男	百パーセント。	【実況】 [02]
03) 準備	長女	ななちゃん。	
03) 準備	父	きょう何年何月何日だ。	【報告】 [09]
05) 次女への声かけ	母	ななちゃん 威張らないで:。	【行動】 [01]
06) 長男の世界	長男	うー へ。 カタツムリに見える。	【実況】 [02]
08) 顎関節症	父	パパ顎痛いな。	【実況】 [02]
11) メモ帳	長女	パパ。あの。ねーね。最初パパのだった黄色いねメモ帳。	
12) レジン液	長女	あ。そうだ。パパ。もうレジン液がなくなっちゃった。	【実況】 [02]
14) 稲妻の熱さ	長男	パパ。稲妻は太陽より何倍熱いと思う?。	【説明】 [13]
16) カタツムリ	長男	パパってカタツムリ食べたことあるの?。	【自己記述】 [07]
18) ママの居場所	次女	ママ。 ママは?。	【実況】 [02]
20) 次男の声かけ	長男	ジャイアンと:。	
21) 焼き芋	長女	パパってスイートポテトと焼き芋どっちが好き?。	【自己記述】 [07]

話題が変わる時の発話には、【行動】 [01] 【実況】 [02] など脱文脈度が低いもののほか、相手の好みや経験を尋ねる【自己記述】 [07] や一般的な話題の【報告】 [09] 【説明】 [13] が用いられている。長男や長女が話題をもちかけても、必ずしも返答が得られないこともあり、応答が得られても、その話題が長く続くものばかりではなかったが、以下に示す、08) 顎関節症と14) 稲妻の熱さは、主に父と長女、長男の間のやり取りが続き、脱文脈度の低いものから高いものまで様々な修辞機能が用いられていた。

3.2.2 顎関節症の話題の発話と修辞機能・脱文脈化指数

図4に、顎関節症の話題における修辞機能の推移を示す。縦方向に脱文脈化指数を示し、左から右に時間の経過を示している。

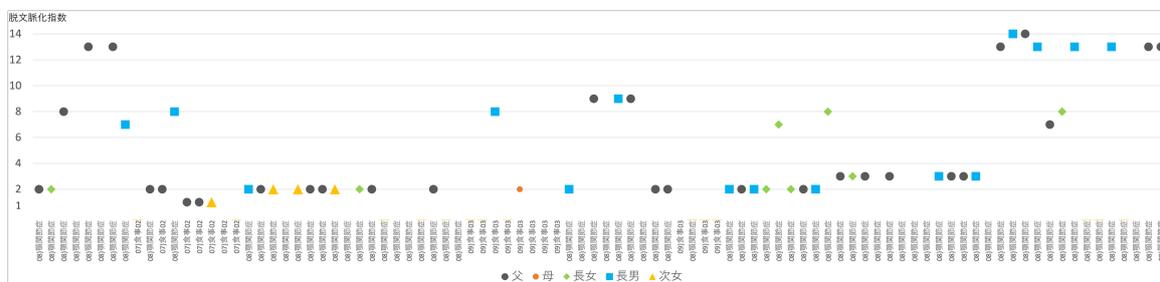


図4 顎関節症の話題場面の修辞機能の推移

食卓に並んでいる料理の確認を終えて、父も着席し、沈黙の後、父の「パパ顎痛いな、今日。」という発話がきっかけで子供3人と顎関節症の話が始まる。冒頭のやりとりを表6に示す。ここでは、顎関節症がどういうものを説明する父の発話が【説明】[13]で脱文脈度が高いが、それ以外は基本的には、子供達が父に痛いかどうかを問い、父が答える、というやりとりで、脱文脈度は低い。次女も不明瞭な発話ながら、「痛いのー?」「顎がー?」と確認し、会話に参加している。

表6 顎関節症の話題の冒頭の発話と修辞機能・脱文脈化指数

父	パパ顎痛いな。	実況 [02]
父	きょう。	実況 [02]
長女	なんで?。	実況 [02]
父	顎関節症つつうの。	
父	これ。	観測 [08]
長男	うん?。	
父	顎が痛くなる。	説明 [13]
長男	ふーん。	
父	噛めない。	説明 [13]
長男	どうして?。	自己記述 [07]
父	痛い。	実況 [02]
長男	どうして痛くなっちゃうんだろう。 (次女がお水を要求)	観測 [8]
長男	どうして噛めないんだろう。	実況 [02]
父	痛いから	実況 [02]
父	歯が。	
次女	(不明瞭) アイト:?(痛い:?)	実況 [02]
父	うん?	
次女	ここ?	実況 [02]
父	痛い痛い	実況 [02]
父	こう顎が痛い痛いって。	実況 [02]
次女	(不明瞭) クンダラ:(顎が:?)	実況 [02]
父	うん	
長女	顎?	実況 [02]
父	顎 (次女との食事についてのやりとり)	実況 [02]

この後、中盤や終盤では、表7に示すように、子供達から痛さについての質問があり、比較のために「おたふく風邪」という言葉がでて、過去におたふく風邪にかかったか、どれだけ顔が腫れたかという【状況内回想】[3]の話題や、おたふく風邪とはなにか、という【一般化】[14]や【説明】[13]のやりとりが交わされる。

表 7 顎関節症の話題の中盤・終盤の発話と修辞機能・脱文脈化指数

中盤			終盤		
長男	めちゃくちゃ痛い?。	【実況】 [02]	長男	おたふく風邪って?。	【一般化】 [14]
父	痛い。	【実況】 [02]	父	ほっぺが腫れる風邪。	【一般化】 [14]
長男	めちゃくちゃ痛い?。	【実況】 [02]	長男	悪い風邪?。	【説明】 [13]
長女	どっかが痛いつて。	【実況】 [02]	父	しゅんすけやってないか。	【自己記述】 [07]
父	これぐらい。	【実況】 [02]	長女	しゅんすけやってない。	【観測】 [08]
長男	痛い 痛い。	【実況】 [02]	長男	悪い風邪?。	【説明】 [13]
長女	おたふく風邪の痛いやつみたいなの?。	【観測】 [08]	長男	パパ 悪い風邪?。	【説明】 [13]
父	おたふくになった?。	【状況内回想】 [03]	父	うん。悪くもない。	【説明】 [13]
長女	ネーネなったよ。	【状況内回想】 [03]			
父	痛かった?。	【状況内回想】 [03]			
長女	うん。				
父	キャンプん時こんななってたよね。	【状況内回想】 [03]			

3.2.3 稲妻の熱さの話題

長男の「パパ、稲妻は太陽より何倍熱いと思う?。」という発話がきっかけで、父、長女、長男とのやりとりがある。図 5 に、稲妻の熱さの話題における修辞機能の推移を示す。

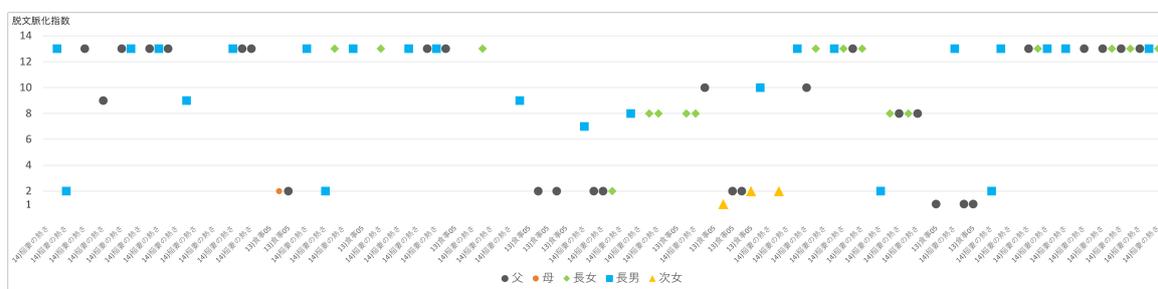


図 5 稲妻の熱さの話題場面の修辞機能の推移

表 8 に冒頭と中盤の発話を示す。長男の【説明】 [13] から始まり、稲妻の熱さから身を守るものとしてのボディガードについての話題に移り、表 9 に示すようにドラえもんにも言及する。長男の主張に対して父が質問したり、長男の発話内容の誤りと思われるところに長女がコメントをしたり補足をして、長男と長女の発話に脱文脈度の高い修辞機能が見られる。この間、次女もテーブルにいて、食事についての発話【実況】 [02] や動作をするが、稲妻やドラえもんなどの会話には加わらず、たまに不明瞭な発話をする。父と長女は、次女の対応【行動】 [01] をしながら、長男との会話に参加している。

表 8 稲妻の熱さの話題の冒頭・中盤の発話と修辞機能・脱文脈化指数

冒頭			中盤		
長男	パパ。稲妻は太陽より何倍熱い	【説明】 [13]	長男	でも:。たぶんね。	
長男	と思う?	【実況】 [02]	長男	ボディガードの があればいいよ。	【説明】 [13]
父	え?。太陽より熱いの?。	【説明】 [13]	長男	ボディガード。	【説明】 [13]
長男	ふん。		父	え。	
父	本当?。		長男	ボディガード。	【実況】 [02]
長男	ふん。		長女	ボディじゃ ボディじゃないよ。	【説明】 [13]
父	太陽のほうが熱いんじゃないの?。	【説明】 [13]	長女	しゅんすけ。	
長男	違うよ。	【説明】 [13]	長男	じゃあ何?。	

表 9 稲妻の熱さの話題の終盤の発話と修辞機能・脱文脈化指数

父	見えないガードマンが何した?。	【状況外回想】 [10]
長男	ドラえもんの中で ガードマンが。	
次女	お肉。	【行動】 [01]
父	ななちゃん これ これある これある。	【実況】 [02]
次女	嫌だ。	【実況】 [02]
長男	しずかちゃん。しずかちゃんのことを守ってたの。	【状況外回想】 [10]
父	うん?。	
次女	嫌だもん。	【実況】 [02]
長男	雷で。	
父	うん。	
長男	雷持てんのかな。	【説明】 [13]
父	カミが 雷落ちたの?。	【状況外回想】 [10]
長女	落ちてない。	【説明】 [13]
長男	ううん。	
長男	雷って持てんのかな。	【説明】 [13]
長女	持てるわけないじゃん。	【説明】 [13]
父	持てるってどういうこと?。	【説明】 [13]
長女	電気なんだから。	【説明】 [13]
次女	ハーカッテ。	
長男	ボディガード。	【実況】 [02]
長女	だからボディじゃないってば。	【観測】 [08]
父	何ガード?。	【観測】 [08]
長女	ガードマン。普通の。	【観測】 [08]
父	ガードマンね。	【観測】 [08]
次女	とうとうーとうーとうーとうーとうーとうーとうーとうーとうー。	
父	ななちゃん座って。	【行動】 [01]
長女	なーちゃん。	
長男	見えない壁のやつあんじゃん。	【説明】 [13]
父	ななちゃん座って。	【行動】 [01]
父	ちゃんと座って。	【行動】 [01]

4. 考察

テーマを設定されて作文を書いたり談話を行う場合、その中で用いられやすい修辞機能はテーマとの関係が見られることがわかっている (田中ほか 2021, 2022)。本稿の分析対象は設定されたテーマではなく、話者たち自身とその場でとりあげたものではあるが、話題内容によって、用いられる修辞機能が異なることがうかがえた。

顎関節症はその時の父親の症状であるため、どのような病気かという説明をするために脱文脈度は高くなるが、基本的には父親の痛みに焦点があてられ、その場の話者たちの場に近い修辞機能が用いられたと考えられる。一方、稲妻の熱さの話題については、長男の「パパ。稲妻は太陽より何倍熱いと思う?。」という問いかけから始まり、話題内容自体がその場と全く関係のないものであるため、脱文脈度が高くなると考えられる。

7歳の長男は、3.2.1節で見たように、話題の始まりとなる発話をしているが、始まり以外でも、顎関節症やおたふく風邪についての父への質問やコメント、児童文学のキャラクターの話、メモ帳の使い方への意見など、脱文脈度の高い発話を行っていた。「顎関節症の話題」のように脱文脈度の高い発話も含まれるものの基本的には脱文脈度の低い発話で構成された話題では、2歳の次女は、不明瞭ではあるが会話に参加する場面が見られた。しかし、基本的に脱文脈度が高い「稲妻の話題」では会話に加わらず、その合間に生じている次女の発話は稲妻関係の内容ではなく食事に関するものであった。田中・小磯 (2019) では、食事場面において、両親の脱文脈度の高い発話をきっかけに、幼児も脱文脈度の高い発話を行うことがわかっているが、本稿の分析対象データからは、2歳ではそのような脱文脈度の高い発話を行う

ことはないことがうかがえた。田中・小磯 (2019) の幼児より年齢が低いこと、及び、田中・小磯 (2019) では両親と3人の会話で子供が1人であったのに対して、本データでは、年上の兄弟が2人いるという状況の違いの影響も考えられるだろう。

5. おわりに

本発表の目的は、親子の会話における話題内容及び年齢と、脱文脈度の関連を明らかにすることであった。家庭での食事場面の親子による談話データを対象として、それぞれの発話について言語表現から修辞機能と脱文脈度を特定し、談話の話題内容によってどのような修辞機能が用いられているか、年齢による違いが見られるかを確認した。分析の結果、まず、食事についての話題では脱文脈度が低く、空間的距離の近い修辞機能が用いられていること、食事以外の話題では、内容に応じて脱文脈度は変わることが確認された。また、子どもの会話への参加は、2歳児は脱文脈度の低い会話には参加できるが脱文脈度の高い会話には参加しておらず、7歳児は脱文脈度の高い発話を自ら発信しており、年齢と使用できる脱文脈度とに関わりがあることが確認された。今後の課題として、同家庭の一年前や一年後のデータにより、同一兄弟の異なる時期の談話の分析を試みることで、また、他家族での食事場面の様子の分析によって、同様の傾向が見られるか確認し、親子会話に共通する特徴を明らかにしたいと考える。

謝 辞

本研究は国立国語研究所のプロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」、JSPS 科研費 JP19K00588、JP20H01264、JP23H00630 によるものです。

文 献

- 岩田純一・石田勢津子・落合正人 (1995). 『児童の心理学』 有斐閣, 東京
- 橋本憲尚 (2009). 「学校教育と知能観の再考 : ”状況に埋め込まれた学習”の視点から」 佛教大学総合研究所紀要:16, pp. 1-18.
- 漁田武雄・漁田俊子 (1999). 「授業と自宅学習の間で生じる文脈依存記憶」 研究紀要:13-2, pp. 205-211.
- 佐野大樹 (2010). 『日本語における修辞ユニット分析の方法と手順 ver.0.1.1: 選択体系機能言語理論 (システムック理論) における談話分析 (修辞機能編)』.
- 佐野大樹・小磯花絵 (2011). 「現代日本語書き言葉における修辞ユニット分析の適用性の検証- 「書き言葉らしさ 話し言葉らしさ」と脱文脈化言語 文脈化言語の関係-」 機能言語学研究, 6, pp. 59-81.
- 田中弥生・佐尾ちとせ・宮城信 (2021). 「児童作文の評価に向けた脱文脈化観点からの検討」 言語処理学会 第27回年次大会 発表論文集, pp. 750-755.
- 佐尾ちとせ・宮城信・田中弥生 (2023). 「修辞機能分析を活用した作文指導」 日本語習熟論研究:1, pp. 140-158.
- 田中弥生・小磯花絵 (2019). 「家庭での幼児の発話の修辞機能: 脱文脈化の観点からの検討」 言語資源活用ワークショップ発表論文集:4, pp. 106-118.

- 田中弥生 (2017). 「相談における談話構造：修辞機能と脱文脈化の観点からの分析」 言語資源活用ワークショップ発表論文集, 1, pp. 69–78.
- 田中弥生・小磯花絵・大武美保子 (2022). 「脱文脈化の観点から見た共想法に基づく高齢者談話の分析」 国立国語研究所論集:22, pp. 137–155.
- 田中弥生・小磯花絵・大武美保子 (2023). 「共想法による話し言葉・書き言葉における修辞機能の特徴－テーマとの関係に着目して－」 言語処理学会第 29 回年次大会発表論文集, pp. 1356–1360.
- C. Cloran (1994). “Rhetorical units and decontextualisation: An enquiry into some relations of context, meaning and grammar.” Unpublished doctoral dissertation, University of Nottingham Nottingham.
- C. Cloran (1999). “Contexts for learning.” Frances C (Ed.), *Pedagogy and the Shaping of Consciousness: Linguistic and Social Processes*. London: Continuum International Publishing, pp. 31–65.